

## 夫婦関係における幻滅感についての研究

牧野裕也

良好な夫婦関係は、夫婦のメンタルヘルスや子どもの適応と関連している。これまで、夫婦関係として扱われてきたのは、夫婦の愛情関係と夫婦間葛藤であったが、限界も多く指摘されていた。本論文では、夫婦関係の幻滅感に着目した。夫婦関係の幻滅感とは、欧米を中心に注目されている概念である。夫婦関係の幻滅感とは、過去から現在に向かって、関係性がネガティブな方向に変化したという時間的変化を含んだ概念である。また、配偶者や結婚生活に対して、過去に抱いていた理想や期待と現在置かれている現実とのギャップを捉えた概念とも考えられている。本邦においても、夫婦関係の実証研究や支援プログラム等の開発において、有用な可能性を持つことが予想された。

本論文は研究1・2・3から構成されている。研究1・2では、日本語版夫婦関係の幻滅感尺度を開発することを目的とした。開発された日本語版夫婦関係の幻滅感尺度が、十分な妥当性・信頼性を持つかどうかを検討した。研究1では、因子構造、内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討した。構成概念妥当性では、先行研究の知見を踏まえ、夫婦の愛情関係、夫婦関係満足、夫婦間葛藤、結婚コミットメントとの関連を検討した。また、基準関連妥当性を検討するため、先行研究の知見に基づき、離婚経験の有無で日本語版夫婦関係の幻滅感尺度の平均値が異なるかどうかを検討した。研究2では、2週間の間隔を空けて、夫婦関係の幻滅感尺度の再検査信頼性を検討した。その結果、本論文では、日本語版夫婦関係の幻滅感尺度が十分な妥当性・信頼性を持つことを確認した。

研究3では、夫婦の愛情関係、夫婦間葛藤、夫婦関係の幻滅感、離婚思念度との関連を検討することを目的とした。具体的には、夫婦の愛情関係、夫婦間葛藤と夫婦関係の幻滅感が関連しており、夫婦関係の幻滅感と離婚思念度が関連しているという構造方程式モデルの作成を試みた。その結果、夫婦の愛情関係、夫婦間葛藤は夫婦関係の幻滅感を經由して離婚思念度と関連していた。さらに、夫婦の愛情関係、夫婦間葛藤と離婚思念度は直接的に関連していた。また、性差の検討を行うため、平均値比較と多母集団同時分析を行った。その結果、平均値比較では夫婦の愛情関係、夫婦関係の幻滅感、離婚思念度で性差が見られた一方、多母集団同時分析では構造方程式モデルの性差は見られなかった。さらに、夫婦の愛情関係、夫婦間葛藤と離婚思念度との関連について、夫婦関係の幻滅感の媒介効果を検討した。その結果、夫婦の愛情関係と離婚思念度との関連、夫婦間葛藤と離婚思念度との関連において、それぞれ夫婦関係の幻滅感の媒介効果が見られた。

最後に、研究1・2・3の結果をまとめ、本論文の意義と本論文の限界について考察した。